

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 25 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2012～2016

課題番号：24401030

研究課題名(和文) 古代・中世地中海世界における宗教空間と社会変動 - トロス遺跡聖堂遺構の発掘調査

研究課題名(英文) Sanctuaries and social changes in the ancient and medieval Mediterranean World - especially focusing on the episcopal church of Tlos, Lycia

研究代表者

浦野 聡 (URANO, Satoshi)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：60211778

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,200,000円

研究成果の概要(和文)：古代から中世にかけての地中海世界における聖域空間と社会の関係の変動を具体的に調査するため、リキア地方(トルコ南西部)のトロス遺跡の司教座聖堂に焦点を定め、発掘調査を行った。この聖堂は、古代の都市の主聖域に建造されており、それ以前の神殿や聖域との関係で重要な知見を得られることが期待されたが、キリスト教の国教化から50年ほど経った五世紀の半ばには完成し、その後、11世紀に至るまで、隣接する旧都市の主神殿クロノス神殿までの空間に教会付属の工房区域が形成され、都市の手工業の中心となったことが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：This research was planned to know what socio-economic relationship the ancient and medieval sanctuaries created in the eastern Mediterranean civic society, Tlos, Lycia (South-Western Turkey), especially focusing on the episcopal church which had been built on the ancient temenos (sanctuary) blocking the access to the Temple of Cronos, the civic tutelary deity, in Late Antiquity. The excavation revealed that this church was constructed in the mid-fifth century, 50 years after the establishment of Christianity and occupied a central position in the manufacture of the city having the space between itself and the former Cronos temple as a workshop district until 11th century.

研究分野：西洋古代史

キーワード：教会 聖域 発掘 中世キリスト教 ビザンツ ローマ帝国 東地中海

1. 研究開始当初の背景

トロスは、古い起源を持ち地勢上重要な位置を占めた都市ながら、その調査は遅れた。19世紀以来、不完全で散発的な碑銘探査が行われた以外、科学的考古学調査は1970年代ドイツ隊が行った表面調査が最初で(Würster, AA, 91, 1976, pp.23-49)。本格的発掘調査は、2002年に始まるアンタルヤ大学によるそれを待たねばならなかった。その理由の一端は、内陸都市が一般に古代地中海世界のネットワーク研究の枠組みの中では注目度が低かったことによつていよう。

しかし、前世紀末から、小アジアでは内陸・山間都市の調査が本格化し始めている。ベルギー隊によるピシディアのサガラッソスの発掘(Waelkens et al., Sagalassos, I-V)に代表されるそれらは、地中海世界において広大な領域を持った内陸都市の重要性に我々の目を開かせつつある。内陸の一次・二次産品(木材、石材、農産物、陶器など)の生産や流通に果たした経済的役割のみならず、中央支配の容易に及びがたい内陸地方の政治的拠点として、都市的アメニティや娯楽(競技会や演劇など)の競争的提供(他都市との競争と提供者たる名望家同士の競争)を通じ周辺の領域を帝国支配に巻き込み、また自らも帝国の秩序に組み込まれていく文化的ネットワークの解明が重要課題として意識されるようになったといえる。

経済・文化両面でのネットワーク形成過程は、相互に密接不可分だが、とりわけ資金提供対象自体が残ることで設立者や維持者にとって永続的な政治的・社会的効果を持った「建築」と「祭儀」の機能が注目されよう。実際、ローマ帝政期の2世紀以降、小アジアの諸都市に急拡大した恵与志向(エヴェルジェティズム)はこの両者を軸に展開されたが(浦野 1999:2002)、具体相が明らかになるにつれますますその研究の必要性が感じられるのは、「建築」と「祭儀」の相関と、キリスト教時代における両者の行く末である。2世紀の小アジアを席卷した建築ブームは3世紀には下火となり、代わって小都市まで巻き込みつつ、多数の競技祭が皇帝の許可で設立され、その世紀の後半にいたるまで盛んに催行されるようになる(Ziegler, 1985; Mitchell, JRS 80, 1990)。続く4世紀にはキリスト教の公認、国教化に伴い、これら競技祭は下火となるが、建築活動は、聖堂の建築などが相次ぐことにより、息を吹き返す。このような大まかな時代ごとの推移が観察されるものは、帝政時代、それらが都市社会の中で果たしていた社会統合機能や支配文化伝播機能が、いかにキリスト教会に受け継がれたのか、継がれなかったのか、あるいはその新しい機能に代置されていったのかといったことについては、重要問題でありながら、未だほとんど研究されていない。

そうした状況の中、トロス市の聖域=教会は、この観点からの研究対象として魅力に富

む。この都市は、他の小アジアの諸都市におけるのと同様、ヘレニズム時代以来、整備されていった公共建築物群(劇場(T)、浴場(B)、アゴラ(A)、ギムナジウム(G)、競技場(S))を有したが、都市プラン上、それらの焦点を形成していたのは、北西にGとS、南西にB、東にT、そして南東側におそらくAを持ち、現在はその一角をそれぞれ聖堂遺構(C)とクロノス神殿遺構(CT)が占める旧聖域区域(FS)だった。実際、この都市は、競技祭を伴う、起源の古い都市主神クロノスの祭儀を有しており(cf. Robert, OMS VII)、その各段階は、旧聖域南西端にあったクロノス神殿から、聖堂建築以前の公共施設を通り抜け、左折して地下のアーケードを経由し競技場へと向かう一連の空間で執り行われていたと考えられる。すなわち、まさしく旧聖域=聖堂区域は、祭儀の際にこそ、そのトポグラフィ上の重要性を祭儀参加者(市民、周辺の農民、外人ら)の誰の目にも明らかに示す、トロス市の最重要公共空間・施設だった可能性が高い。古代末期に新たに建築された司教座聖堂はこうした古代的公共空間・祭儀空間の有機的な連関ネットワークの只中に、神殿に取って代わって位置することになった。12世紀に不使用に帰してからこれまで、ほぼ手付かずの状態では放置されてきた旧聖域=聖堂遺構を発掘し、我邦史学、考古学、建築学、美術史学、碑銘学のスキルを総動員しつつ聖堂の建築・改築過程や旧聖域遺構の空間構成・用途を明らかにすることは、トロスという地域の中核都市を素材として、内陸都市における「建築」と「祭儀」の社会的・政治的統合機能の変容・消長過程を正確に再構成しうる絶好の機会になると期待された。

2. 研究の目的

トルコ・リキア地方の**古代都市トロス遺跡**において、異教聖域の跡地に建てられたと考えられる司教座教会聖堂遺構の発掘を行い、以下の諸点を解明することを目的とした。

(1)聖堂の 建造時期、 放棄時期、 修築・改築時期、 改築各期における建築様式・装飾様式の変化、 各期における機能の変化、 建築に用いられたスポリア(転用材)の由来。(2)聖堂建築以前にあった旧異教聖域の区画範囲、 築造時期、 放棄時期、 機能・性格、 遺構・部材転用過程、 転用材に見られる碑文解読。

(3)古代末期トロス社会におけるキリスト教信仰受容に伴う 異教信仰放棄・並存過程、 都市景観変容過程とその特質、 社会慣習(祭儀・礼拝・公共行事)変容過程とその特質。

3. 研究の方法

教会遺構(C; 上が北東)は、拝廊部、前庭部を含め、縦50m、横30mの、十字翼廊型バシリカである。平成24年度から27年度

までは、床面保護のため、聖堂使用時の床面から10～20cmのレベルまで聖堂内部に堆積した表土を剥ぎ、崩落部材の量と質を評価するとともに、現存の上部構造の解析と保存を行う。また26年度からは、使用時床面のモザイクの様式を確定するため、北側廊から祭壇部にかけて表土を除去し、モザイク面の清掃を行った後、記録と保存作業を行う。これらの作業を通じて、聖堂の建築・改築の諸段階の年代・質を確定する。26年度からは聖堂外部でも発掘を進め、聖堂付属建築物の様子を明らかにすると共に、聖堂建築以前の旧聖域遺構のプラン・性格を明らかにする。いずれの年度にも、適宜発掘成果検討会を開き、キリスト教化が都市社会にもたらした社会的・政治的変容に関する議論を深め、その成果は随時『史苑』誌上にて中間報告を行う。28年度には、床面のすべての堆積表土を取り除き、床面状態を確認する。29年度以降に、英文の最終報告書を出す。



4. 研究成果

(1) 聖堂

聖堂の建造時期

5世紀半ばであることがほぼ確実となった。その理由は、モザイク床面の舗装を担当した工房が、隣接都市クサントスの東聖堂のナルテックスと北側廊を舗装した工房Bと同じであると考えられるからである。トロス聖堂では、南側廊の床面が広範に破壊され、初期～中期ビザンツ時代にかけて墓地とされていたが、そこから、4世紀後半の貨幣が5点出土した。これ以外に、聖堂の建設年代を推測させる手がかり(とりわけ指標土器)は出土しなかったが、予告されているクサントス東聖堂の発掘報告には、指標土器等のデータが掲載されることになっているとのことで、トロス聖堂も同時期の建造と考えてよい。

聖堂の放棄時期

出土貨幣や出土陶器(とりわけ彩釉陶器)から11世紀後半、遅くとも12世紀には放棄されたことが明らかとなった。その一方、屋根の崩落を免れたとみられる翼廊北翼では、たき火の痕跡やそこでの羊・山羊の骨が出土していることから、聖堂放棄後に、旅人や遊牧者のシェルターとなったか、定住民の調理

場となったものと見られる。

聖堂の修築・改築時期

トロス聖堂は、6～7世紀と10～11世紀の二度にわたり、改築・再建されたと考えられる。いずれも、ほとんど摩耗の見られない出土貨幣(前者は銅貨、後者は金貨)の解釈による。後者の再建については、テマ・キュビライオタイのノタリオスという役人の二点の封緘も年代特定材料となる。最初の再建時の聖堂は、二度目の再建までの間、不使用に期していた期間を相当程度有するものと考えられる。8世紀から9世紀にかけての証拠が何一つ見いだされないのみならず、最初の再建時の建築部材も柱や柱頭以外、余り残っていない。長期にわたる荒廃の期間に再利用できないほどのダメージを受け、再々建時に撤去されてしまったものであろう。

各期の建築様式・装飾様式の変化

第一回目の再建は、身廊と側廊を分かつ列柱に高さ1mほどの柱台を取り付け、柱間に80cmほどの高さのパラペットを施すとともに、その延長上、身廊と翼廊を分かつ仕切り壁を設けるといったものであった。また身廊中央部には長さ4mにも及ぶ巨大な説教壇が据えられた。第二回目の再建は、祭壇部と身廊部の間に高さ4m以上のイコノスタシス(聖障)を設けるといったものであった。フルートのない円柱6本とそれぞれの上にビザンツ風柱頭、その上にパルメット文のアーキトレーブを施す。これらは、設置された場所に崩落した状態のまま見つかったが、説教壇の上には、加工途中の柱頭も残されており、また翼廊南翼第7室には、加工前と考えられる柱頭や柱も置かれていたので、この再建は未完成のまま計画を放棄されたか、完成途中で天災に見舞われ再々建される途中放棄されたかのいずれかと考えられる。

各期における機能の変化

建築当初の聖堂は、一段高く作られた祭壇以外、視線を遮る大きな装飾物・家具もなく、身廊と翼廊、身廊と側廊もスタイロバイトで仕切られるのみの開放的な空間構成を持っていたものと考えられる。壁の内装も古代からの伝統を引き継ぐ意匠のデザインで飾られ、古代の集会所としての公共建築物の性格を色濃く引き継ぐものであった。

それに対し、最初の改築・再建後は、側廊と身廊がパラペットで区切られ、また祭壇部と翼廊も仕切り壁で区切られるなど、祭祀空間としての身廊 祭壇部に対する空間的重視が認められる。そうした改変の結果、側廊部と翼廊部は、祭祀空間から切り離され、別の使い方をされることが可能になった。南側廊から翼廊南翼にかけての外縁部、また翼廊北翼外縁部は墓地や墓室に使用されるようになった。翼廊北翼の祭壇部隣接部は、祭祀のためのバックヤードとして用いられるよ

うになる一方、翼廊南翼の祭壇部隣接部は、完全に祭壇部とは隔絶され、世俗の用途の倉庫に転じられたものと考えられる。

再々建の試みは途中で放棄されてしまったので、その完成形がいかなる空間構成を持ち、いかなる機能を付与されることを意図されたのか、知ることは困難である。しかし、再々建における建築順序や、その最中の空間利用のあり方を見てみると、まずは祭祀（リタジー）空間の再建と利用再開が急がれたようであり、さらに注目すべきことに、初期聖堂の規模の縮小を伴わず、再建が計画されたようである。墓地の利用、また墓室における祖先崇敬は再建中も継続された。翼廊南翼第7室はいったん崩落したのち、瓦礫を除去され、再建の作業場、ないし資材置き場として使われた。ここからは、作業員の飲食の痕跡が見られる。

建築に用いられた転用材の由来

2点、クロノス神殿の石材がシントロノンの座席に用いられているほか、瓦礫材をセメントで固めて作った外壁には様々な古代の建築物の部材が用いられている。クロノス神殿は、中世にいたるまで解体されることなく、工房の一角に残されていたと考えられるので、聖堂建築に用いられた転用材は、基本的には、すでに崩落した古代の建築物から持ってこられたものと考えるのが妥当であろう。最初の再建後の説教壇の欄干は、リキア墓の石棺側板をわざわざ切り取って用いたものであり、これは、大きな石板が再建時には入手しがたくなっていたことを反映しているものと思われる。

(2) 聖堂建築以前にあった異教聖域

区画範囲

現在聖堂が確認される場所から南のクロノス神殿にいたるまでの60m×100mの範囲が古代のテメノスであったと考えられる。

築造時期、放棄時期、機能・性格

聖堂の床面がかなりの範囲にわたって残っていたため、その下の構造について調べることはできなかった。ただ、聖堂の南側廊外壁は、聖堂の中心軸に対して反時計回りに3度ほどずれており、また、翼廊北翼の墓の下からも同じ角度を示す以前の建築物の基礎が見つかっているため、なんらかの建築物があったものとみられる。

遺構・部材転用過程

(1) - 参照

転用材に見られる碑文解読。

碑文は10数点が確認された。いずれもローマ帝政期の碑文と考えられる。

(3) 古代末期～中世トロス社会

キリスト教信仰受容に伴う異教信仰放

棄・並存過程

併存の痕跡は全く確認されなかった。トロス聖堂は、都市の主神殿、クロノス神殿へのアクセスを妨げる形で建造されているので、5世紀半ばの築造段階では、未だに異教への警戒は残っていたかもしれない。しかし、聖堂とクロノス神殿の間の地区は、5世紀末から6世紀には、聖水容器の押し型が出土するなど、工房区域になっていたと考えられ、すなわち、そこにおいて、異教信仰が存立する余地はなかったと思われる。

都市景観変容過程とその特質

5世紀の後半には、都市の中心は、運動場と競技場を隔て、数百メートル西側のアクロポリス南麓に移った。その居住区域は、城壁で囲まれたが、旧都市中心に位置した聖堂は、クロノス神殿にいたるまでの旧テメノス区域を、別の壁で囲まれることになった。残念ながら、この城壁の築造年代は明らかではないが、上述のように、聖堂南側からクロノス神殿にかけての区域が工房地区に変容したのが5世紀末のことであったのなら、この城壁で囲まれた区域は、古代末期からひとつの経済的重要性を持つ地区としての統一性を持つことになったと考えられる。残念ながら、アクロポリス南麓の調査が進んでいないので、聖堂周辺の工房地区との関係は明らかになっていないが、この地区は、出土貨幣から11世紀にいたるまで使用し続けられたと考えられ、古代末期～中世のトロス社会を考える上で、きわめて重要な地域であろうという見通しが得られた。

社会慣習（祭儀・礼拝・公共行事）変容過程とその特質

聖堂は8世紀から11世紀にいたるまで不使用に帰っていたと考えられる。その間、聖堂の機能を担ったのは、クロノス神殿のさらに南に位置する、古代の大浴場の温浴室であった。冷浴室からは、50基にも及ぶ墓が見つかっている。すなわち、聖堂の崩壊後も、旧テメノス区域周辺は、住民の宗教生活の結節点として機能していた。聖堂からクロノス神殿までの区域の発掘は未だになされていないので、明確なことはわからないが、そこが古代末期以降の工房地区機能を維持していたのなら、古代末期から中世にかけてのこの地域は、宗教と経済の中心として機能していたと考えられ、それは、古代においては、およそありえない形であった。古代の聖域は、そこで商業活動が行われることはあったとしても、工業生産活動が行われることはなかったからである。古代末期に、教会が農業生産やその加工産業に関わったことは、他の地域（例えば北アフリカ）などでは明らかにされており、西ヨーロッパ諸国では、修道院が中世における生産活動の拠点になったことが明らかだが、小アジア、すなわち、ビザンツ帝国の主領域では、未だに十分具体相が確

かめられていない重要な局面であるので、今後のさらなる調査が望まれる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 21 件)

浦野聡、トロス主教座聖堂発掘報告(二〇一五) - 考古学・建築上の所見から、史苑、査読あり、76 - 2、2016、61-96

浦野聡、トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一四) - 考古学・建築上の所見から、史苑、査読あり、75 - 2、2015、305-345

浦野聡、トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一三) - 考古学・建築上の所見から、史苑、査読あり、74 - 2、2014、129-157

浦野聡・深津行徳、トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一二) - 建築上の所見を中心に、史苑、査読あり、73 - 2、2013、89 - 120

浦野聡、トロス司教座聖堂発掘報告(二〇一一) - 建築上の所見を中心に、史苑、査読あり、72 - 2、2012、113 - 130

浦野聡、トロス司教座聖堂の発掘について、史苑、査読あり、71 - 2、2011、81 - 103

KUSABU Hisatsugu, Heresiological Labeling in Ecumenical Networking from the Ninth to Thirteenth Centuries: The Byzantine Oikoumene Reconsidered, Asian Review of World Histories, 査読あり, Vol. 4, No.2, 2016, 207-229

草生久嗣、ロシア ビザンツ緩衝地帯の蛮族観について - 二世紀ビザンツ史書におけるペチェネグを題材に、小澤実・長縄宣博編『北西ユーラシアの歴史空間 - 前近代ロシアと周辺世界』北海道大学出版会、査読あり、2016、pp. 105-131

草生久嗣、「ビザンツ」帝国の「ローマ人」：アイデンティティの射程、西洋中世研究、査読なし、7号、2015、5-24

KUSABU Hisatsugu, Ecumenical Orthodoxy and Heterodoxy in Post Late Antiquity, New Approaches to the Later Roman Empire, edited by T. Minamikawa, Kyoto University: Kyoto, 査読なし, 2015, pp. 163-177

KUSABU Hisatsugu, Orthodox Identity for Byzantine Theologians, Heresiologists, and 'Inquisitors': A Byzantine View of Popular Faith in the Twelfth Century, Soyang Chungsesa Yongu, 査読あり, Vol. 33,

2014, 121-149

草生久嗣、ビザンツの「神秘主義」と「異端」 - コンスタンティノス・クリュソマルロスの事例(1140)を題材に)、エクフラシス ヨーロッパ文化研究、査読あり、Vol. 2、2012、pp. 17-27

師尾晶子、古代ギリシアにおける石材・石碑の行く末と再利用、千葉商大紀要、査読あり、53-2、2016、27-40

師尾晶子、トロス教会聖堂出土碑文の概要(5) 2014年度の発掘から、史苑、査読あり、75-2、2015、368-376

師尾晶子、トロス教会聖堂出土碑文の概要(4) 2013年度の発掘から、史苑、査読あり、74-2、2014、168-175

師尾晶子、トロス教会聖堂出土碑文の概要(3) 2012年度の発掘から、史苑、査読あり、73-2、2013、138-145

師尾晶子、トロス教会聖堂出土碑文の概要(2) 2011年度の発掘から、史苑、査読あり、72-2、2012、156-162

太記祐二、トロス遺跡バシリカ式聖堂の平面寸法について、2017年度、日本建築学会大会(中国)(広島工大2017年9月)、査読あり[予定]

太記祐二・川本智史、トロス遺跡のバシリカ式聖堂について、2013年度 日本建築学会九州支部研究報告(佐賀大2014年3月) 査読あり 計画系(53号)581-584

OGASAWARA Hiroyuki, 'Osmanlı Hanedanı'nın Atası Olarak Kayı Han'ın Seçilmesi: Veraset Usulü Açısından Bir Bakış (オスマン王家の父祖としてのカユ・ハン 継承方法の視点から), XVI. Türk Tarih Kongresi 20-24 Eylül 2010, Ankara: Kongreye Sunulan Bildiriler, 3-1, Ankara: Türk Tarih Kurumu, 2015, 査読あり、525-533.

②中谷功治、ふたりの叛徒トマス 9世紀ビザンツの大反乱をめぐって、人文論究(関西学院大学文学部:人文学会) 査読なし、66巻3号、2016、1-23

[学会発表](計 3件)

KUSABU Hisatsugu, Comnenian Orthodoxy and Byzantine Heresiology in the Twelfth Century: A Study of the Panoplia Dogmatica of Euthymios Zigabenos, The Workshop on Late Antiquity and Byzantium, The University of Chicago, USA, Chicago, March 8th 2013

師尾晶子、ミレトスとアテナイ- *IG I³ 21* と *Milet 6.3.1020*、古代ギリシア文化研究所 2016 年研究会、東京大学、東京都文京区、2016 年 11 月 5 日

Akiko Moroo, 'Barbaroi' in Attic and Greek Inscriptions, Oxford Epigraphy Workshop, University of Oxford, Oxford, UK, 15 June 2015.

〔図書〕(計 7 件)

浦野聡編著・師尾晶子他著、古代地中海における聖域と社会、勉誠出版、2017 年 2 月、432

加藤磨珠枝・益田朋幸、西洋美術の歴史 2 中世 1 キリスト教美術の誕生とビザンティン世界、中央公論新社、2016 年、607

益田朋幸編、聖堂の小宇宙、(ヨーロッパ中世美術論集 4) 竹林舎、2016 年、438

益田朋幸、ビザンティン聖堂装飾プログラム論、中央公論美術出版 2014 年 2 月、554

甚野尚志・益田朋幸編、中世の時間意識、知泉書館、2012 年 5 月、374

益田朋幸、ビザンティンの聖堂美術、中央公論新社 2011 年 6 月 231

中谷功治、テマ反乱とビザンツ帝国 コンスタンティノーブル政権と地方軍団、大阪大学出版会、2016 年、430

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浦野 聡 (URANO, Satoshi)
立教大学・文学部・教授
研究者番号：60211778

(2) 研究分担者

師尾 晶子 (MOROO, Akiko)
千葉商科大学・商経学部・教授
研究者番号：10296329

太記 祐一 (TAKI, Yuichi)
福岡大学・工学部・教授
研究者番号：10320277

草生 久嗣 (KUSABU, Hisatsugu)
大阪市立大学・文学研究科・准教授
研究者番号：10614472

中谷 功治 (NAKATANI, Koji)
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：30217749

小笠原 弘幸 (OGASAWARA, Hiroyuki)
九州大学・人文科学研究科・准教授
研究者番号：40542626

深津 行徳 (FUKATSU, Yukinori)
立教大学・文学部・教授
研究者番号：70208916

益田 朋幸 (MASUDA, Tomoyuki)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：70257236

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

村田 光司 (MURATA, Koji)
日本学術振興会・特別研究員

田中 咲子 (TANAKA, Emiko)
新潟大学・教育学部・准教授

松崎 哲也 (MATSUZAKI, Tetsuya)
奈良文化財研究所・特別助教

奈良澤 由美 (NARASAWA, Yumi)
城西大学・現代政策学部・准教授

Taner KORKUT
Professor, Akdeniz University